

新・ゴーマニズム宣言『戦争論』を異化する

「ごーまん、かましてよかですか！」

なぜ『戦争論』を取り上げるのか

「南京大虐殺」は無かった。などという戦後史の再評価が論壇を賑わせているが、過去の侵略戦争を美化してしまうような歴史観はいかなるものか？

また、私的な価値判断と「公」のそれとを対立させ、後者に前者を従わせようとする小林の発想が、一定の支持と共感をもって受け止められている背景を巡るなかから、自由党・小沢的「普通の国家」論への反論をなしていけるのではないか。

## 『戦争論』でテーマとされていること

この冊子は、彼の『新・ゴーマニズム宣言』での特集であり、過去の日本帝国主義によるアジア侵略を相対化する視点で描かれた偏向的漫画冊子であると論断することはとても容易い。しかし、小林が述べている「権利はいくらでも主張するが、義務は納税くらいしか負わない。日本の個人主義者は国家が嫌いである。」などと言われると、やはり何となく頷いてしまうのは、現在のニヒリズム的な状況に対する、ただ単にアンチテーゼだけではない説得力をもちうるものだからである。それが世代を超えて若者の支持を得ている根拠にもなっているのであるが、ある意味では短絡した国家主義へと収斂していく危険性を孕んでいるともいえる。ともあれ、以下小林の主張に沿って内容を検証していくことにする。

## 「個」と「公」の分離

この冊子は全二十二章から成っていて、特に二十章の「個と公」あたりが主張の核心になるのではないだろうか。ここで小林は普遍的な「公共性」なるものを引き合いに出し、それを「国」のためにと言い換えることによって、個の確立へとむかう風潮を否定する。ただ、個々人の「個性」は公共性のなかにあつての個性であり、ゆ

えに個と公は対立させるものではない。「公が個を支えている。」という短絡させた主張になる。この主張はいかなものだろうか。因みに、この主張は次の章で「大東亜戦争こそが日本人の民族性をかけた闘いだった」という公国（＝皇国）史観へとつながっていくのである。

## 『戦争論』に対する知識人の反応

インターネットなどで検索してみても一番多いのが、「歴史の捏造だ。」という意見。これはもったものだけども、「南京大虐殺」があったのか無かったのか、などという事実認定の話になってしまっただけ、小林の思うつぼである。そもそも寄って立つ価値観が違うという前提に立って批判していかなければならないのではないだろうか。その意味では、『戦争論・妄想論』での宮台真司氏や姜尚中氏の批判的を射ているのではないだろうか。

・宮台氏は、国家が「公（パブリック）」であると、仮に仮定しても、小林の主張には、「公」と「公共性」の意味の取り違えがあると指摘している。そもその語源から言って、ブルジョア市民社会的な公とは、各共同体間を調停するものとしてのセツルメントな統合であり、極めて日本的な「共同体のメンバーはその共同体を愛せ」などというロジックは通用しないのである。

・姜氏は、小林が「排他的アイデンティティー」としての「日本人やめますか、それとも国のために死ねますか」という二者択一の選択を迫っていることを受けて、戦後の日本の民主主義が、「切り落としてきた」いろいろ

ろな位相での歴史の体験を見つめなおすべきだと主張している。そしてそういった「種的同一性」を求める日本人観の払拭を提言している。

## われわれは如何に生きるべきか

『戦争論』が提起している問題は、ある側面だけ採ってみれば「個的な私利私欲を捨て公共性に生きろ」というメッセージを含んでいる。阪神大震災や日本海での重油流出事故の際に、各地から駆けつけたボランティアの存在は、その希望である。しかし一方で小林や宮台氏が批判しているような「サヨク」の組織された活動は、やはり限界性があることも事実であろう。問題なのは、公共性というものの各私性というか、自主性・主体性ということになる。小林の言葉でいえば「権利と義務の結合」としての能動性とても形容できるかも知れない。

戦争に巻き込まれたくない、とか、自分の生活を守りたいというような利己の意識にも、「公共善としての国家の為に死ぬ」というアナクロな感性にも与しない、社会の在り方を考えていくために、以上を討論の素材としたい。

(1999.9.26)